

第23回「整形・災害外科 優秀論文賞」のお知らせ

本誌編集委員会では、昨年一年間の本誌に掲載された投稿論文（論究・臨床・手術・経験・症例欄等掲載論文）を対象に優秀論文の選考を行ってまいりましたが、この度、下記の論文が小誌における2018年（整形・災害外科 第61巻）の優秀論文に決定いたしました。

超音波検査による軟部腫瘍内の血流および弾性の評価

大鹿周佐ほか（弘前大学大学院，整形外科）

〔整・災外 61：101—106，2018〕（1号）

非ステロイド性消炎鎮痛剤長期服用による胃・十二指腸 粘膜傷害と腎障害の発生状況調査

片江祐二ほか（赤池協同医院，整形外科）

〔整・災外 61：1403—1409，2018〕（11号）

解剖学的 ACL 再建術の再鏡視所見

—2束と3束再建術式の前向きランダム化比較試験—

松村崇史ほか（札幌医科大学，整形外科）

〔整・災外 61：1625—1631，2018〕（13号）

選者評

2018年の第61巻に掲載された投稿論文から、本誌編集主幹5名の投票により、優秀論文として上記の3編が選ばれました。

大鹿周佐氏の論文は、超音波検査（US）を用いて軟部腫瘍内の血流と弾性を評価したもので、これらを組み合わせることで軟部腫瘍の良悪性の鑑別診断精度が向上すると報告しています。近年、USは急速に普及していますが、本研究は外来診療におけるUSの新たな可能性を示すものと思われます。

片江祐二氏の論文は、整形外科外来における長期NSAIDs処方の実態と胃・十二指腸粘膜傷害、腎障害の発生状況の調査です。服用期間は平均1,205日で、胃・十二指腸粘膜傷害を4割に認め、服用後の腎機能は有意に悪化しました。高齢者を治療する機会が多いわれわれ整形外科医に警鐘を鳴らす結果です。

松村崇史氏の論文は、前十字靱帯の2束再建術（DB）と3束再建術（TB）を前向きランダム化試験により比較検討したものです。解剖学的に再建された二群間に臨床的差は認めませんでしたが、滑膜被覆の傾向に違いが認められました。著者らは脛骨の靱帯付着部の形状によって術式を選択する必要性を示唆しています。

いずれの論文も、整形外科診療に直結する素晴らしい内容であり、優秀論文にふさわしいものと評価されました。

受賞のことば

この度は、第23回「整形・災害外科 優秀論文賞」に選出していただき大変光栄に存じます。

軟部腫瘍は良悪性の判別が難しい疾患であり、一般医のみならず専門医であっても誤診することがあります。日整会が監修した『軟部腫瘍診療ガイドライン2012』では、超音波検査の推奨・根拠のGradeはCであり、未開拓の分野でした。本研究では、超音波検査の新規の撮像手段であるSuperb-Microvascular ImagingやShear Wave Elastographyを用い、軟部腫瘍を評価しました。研究を開始した当初は、機器の操作に不慣れな上に評価基準も定まらず、試行錯誤する毎日でした。地道に症例を積み重ね、慌てずにじっくり観察したことが良い結果につながったと感じています。本研究の内容が、皆様の日常診療の一助になれば幸いです。

最後に、本研究を行う上でご指導・ご支援をいただきました石橋恭之教授はじめ教室スタッフの皆様に心より感謝申し上げます。

大鹿周佐（弘前大学大学院医学研究科，整形外科科学講座）



この度は優秀論文賞に選出していただき大変光栄に存じます。

NSAIDsは胃粘膜傷害や腎障害などの副作用が報告されているにもかかわらず、整形外科で最も頻用され、長期にわたる投与が漫然となされているのが現状であります。NSAIDsの短期投与の報告はありますが、長期の報告が少なかったことが本研究をしようと思ったきっかけです。本研究では、NSAIDsの6カ月以上の服用で、上部消化管内視鏡検査の39.1%に胃・十二指腸粘膜傷害が起これ、NSAIDs服用前と比べて腎機能が有意に悪化することがわかりました。地方の診療所の知見ではありますが、先生方のNSAIDsの処方を見直すきっかけとして臨床に役立てていただければ幸いです。

この臨床研究を行うにあたり内視鏡検査をしていただいた内科の先生方に、この場をお借りして感謝申し上げます。

片江祐二（赤池協同医院，整形外科）



この度は第23回優秀論文賞に選出していただき、誠にありがとうございます。

解剖学的前十字靭帯（ACL）再建術では、正常靭帯付着部に骨孔を作製することを前提として、より正常靭帯配列を模倣できるように2束再建術と3束再建術が開発されてきましたが、どちらの術式がどのような優位性を持つのかは不明でした。本研究では、臨床所見において見いだせなかった差を、再鏡視によって靭帯を直接観察することで、2束再建術では後外側線維束、3束再建術では前内側線維束に対して課題があることを明らかにすることができました。今後はさらに症例数を重ねるとともに、他の因子を含めて解析し、最終的には術前に最適な術式を選択し、患者さんに合わせたACL再建術を実施できるように検討していきたいと考えております。

本研究は、大坪英則先生の発想，論文作成のご指導によりこのような形にまとめることができました。この場をお借りして心より深謝申し上げます。

松村崇史（札幌医科大学医学部，整形外科科学講座）



優秀論文の筆頭執筆者には、賞状ならびに副賞として金一封・記念品を贈呈いたします。

本誌編集委員会では今後も継続的に各年毎の掲載投稿論文を対象に「整形・災害外科 優秀論文賞」の選考を行ってまいります。読者皆様の活発な研究発表の場として、小誌を存分にご活用ください。

（整形・災害外科 編集室）